

揚州の寺 大明寺 鑑真紀念堂 観音禪寺 重寧寺 天寧寺

揚州市(ようしゅうし)は中華人民共和国江蘇省に位置する地級市。本来「揚州」と書かれ、漢代に置かれた13州の一つであった。それが唐代に表記を「揚州」と改められた。揚子江(江水)を中心に、北は淮水から南は南嶺山脈までの地域のことである。現在の江蘇省全体よりも広く、江南(揚子江の南部)の広大な地域をも含んでおり、魏晉南北朝においては、全国一の重要な地位を占める地域であった。

揚州は北に徐州、豫州と接し、西は荊州、南は交州に接していた。揚州は三国時代、呉の孫策・孫権によって支配された土地である。揚州は南部が山岳地帯であるために、人も物資も北部に集中した。このため、三国時代の呉では戦争が相次いで人口不足に陥り、兵力が減少して国が滅亡する一因を成した。しかし揚州は中国南部の要衝地帯であり、晋滅亡後に建国された東晋は、揚州を本拠地としている。産業は所轄する儀徴市のポリエステル繊維は中国を代表する繊維産業のひとつとなっている。農産物ではレンコンの収量が全国でも有数である。

鑑真和尚鑑真(がんじん、鑑真、鑑真、688年(持統天皇2年) - 763年6月25日(天平宝字7年5月6日))は、奈良時代の帰化僧。日本における律宗の開祖。俗姓は淳于。

唐の揚州江陽県の生まれ。14歳で智満について得度し、大雲寺に住む。18歳で道岸から菩薩戒を受け、20歳で長安に入り、翌年弘景について登壇受具し、律宗・天台宗を学ぶ。律宗とは、仏教徒、とりわけ僧尼が遵守すべき戒律を伝え研究する宗派であるが、鑑真は四分律に基づく南山律宗の継承者であり、4万人以上の人々に授戒を行ったとされている。

揚州の大明寺の住職であった742年、日本から唐に渡った僧栄叡、普照らから戒律を日本へ伝えるよう懇請された。奈良には私度僧(位を持たないインチキ坊主)が多かったため、伝戒師(僧侶に位を与える人)が必要であり、聖武天皇は優秀な僧侶を捜していた。仏教では、新たに僧尼となる者は、戒律を遵守することを誓う必要がある。戒律のうち自分で自分に誓うものを「戒」といい、サンガ内での集団の規則を「律」という。戒を誓うには、10人以上の正式の僧尼の前で儀式(これが授戒である)を行う必要がある。これら戒律は仏教の中でも最も重要な事項の一つとされているが、日本では仏教が伝来した当初は自分で自分に授戒する自誓授戒が行われるなど、授戒の重要性が長らく認識されていなかった。しかし、奈良時代に入ると、戒律の重要性が徐々に認識され始め、授戒の制度を整備する必要性が高まっていた。**栄叡**と**普照**は、授戒できる僧10人を招請するため渡し、戒律の僧として高名だった鑑真のもとを訪れた。栄叡と普照の要請を受けた鑑真は、渡日したい者はいないかと弟子に問いかけたが、危険を冒してまで渡日を希望する者はいなかった。そこで鑑真自ら渡日することを決意し、それを聞いた弟子21人も随行することとなった。その後、日本への渡海を5回にわたり試みたがことごとく失敗した。

日本への渡海

最初の渡海企図は743年夏のことで、このときは、渡海を嫌った弟子が、港の役人へ「日本僧は実は海賊だ」と偽の密告をしたため、日本僧は追放された。鑑真は留め置かれた。**2回目**の試みは744年1月、周到な準備の上で出航したが激しい暴風に遭い、一旦、明州の余姚へ戻らざるを得なくなってしまった。

再度、出航を企てたが、鑑真の渡日を惜しむ者の密告により栄叡が逮捕をされ、**3回目**も失敗に終わる。

その後、栄叡は病死を装って出獄に成功し、江蘇・浙江からの出航は困難だとして、鑑真一行は福州から出発する計画を立て、福州へ向かった。しかし、この時も鑑真弟子の靈佑が鑑真の安否を気遣って渡航阻止を役人へ訴えた。そのため、官吏に出航を差し止められ、**4回目**も失敗する。

748年、栄叡が再び大明寺の鑑真を訪れた。懇願すると、鑑真は**5回目**の渡日を決意する。6月に出航し、舟山諸島で数ヶ月風待ちした後、11月に日本へ向かい出航したが、激しい暴風に遭い、14日間の漂流の末、遙か南方の海南島へ漂着した。鑑真は当地の大雲寺に1年滞留し、海南島に数々の医薬の知識を伝えた。そのため、現代でも鑑真を顕彰する遺跡が残されている。

751年、鑑真は揚州に戻るため海南島を離れた。その途上、端州の地で栄叡が死去する。動揺した鑑真は広州から天竺へ向かおうとしたが、周囲に慰留された。この揚州までの帰上の間、鑑真は南方の気候や激しい疲労などにより、両眼を失明してしまう(鑑真が渡日前に失明していたという説は鑑真の伝記である「唐大和上東征伝」を主に論拠とし

ている。しかし、最近の研究では渡日翌年に書かれた東大寺の良弁に經典の借用を申し出た鑑真奉請經卷状は弟子の代筆説より鑑真の直筆説の可能性が高くなったことから、渡日後も完全には失明していなかったとする説もある)。752年、必ず渡日を果たす決意をした鑑真のもとを訪れた遣唐使藤原清河らに渡日を約束した。しかし、当時の玄宗皇帝が鑑真の才能を惜しんで渡日を許さなかった。そのために753年に遣唐使が帰日する際、遣唐大使の藤原清河は鑑真の同乗を拒否した。それを聞いた副使の古麻呂は密かに鑑真を乗船させた。11月17日に遣唐使船が出航、ほどなくして暴風が襲い、清河の大使船は南方まで漂流したが、古麻呂の副使船は持ちこたえ、12月20日に薩摩坊津の秋目に無事到着し、実に10年の歳月を経て仏舍利を携えた鑑真は宿願の渡日を果たすことができた。なお、皇帝の反対を押し切ってまで日本に来た理由について、小野勝年は日本からの留学僧の強い招請運動、日本の仏教興隆に対する感銘、戒律流布の処女地で魅力的だったという3点を挙げている。それに対して金治勇は、聖徳太子が南嶽慧思の再誕との説に促されて渡来したと述べている。

日本での戒律の確立

753年(天平勝宝5年)12月26日、鑑真は大宰府観世音寺に隣接する戒壇院で初の授戒を行い、754年(天平勝宝6年)1月には平城京に到着し聖武上皇以下の歓待を受け、孝謙天皇の勅により戒壇の設立と授戒について全面的に一任され、東大寺に住することとなった。4月、鑑真は東大寺大仏殿に戒壇を築き、上皇から僧尼まで400名に菩薩戒を授けた。これが日本の登壇授戒の嚆矢である。併せて、常設の東大寺戒壇院が建立され、その後761年(天平宝字5年)には日本の東西で登壇授戒が可能となるよう、大宰府観世音寺および下野国薬師寺に戒壇が設置され、戒律制度が急速に整備されていった。

758年(天平宝字2年)、淳仁天皇の勅により大和上に任じられ、政治にとられる労苦から解放するため僧綱の任が解かれ、自由に戒律を伝えられる配慮がなされた。

759年(天平宝字3年)、新田部親王の旧邸宅跡が与えられ唐招提寺を創建し、戒壇を設置した。鑑真は戒律の他、彫刻や薬草の造詣も深く、日本にこれらの知識も伝えた。また、悲田院を作り貧民救済にも積極的に取り組んだ。

763年(天平宝字7年)唐招提寺で死去(入寂)した。76歳。死去を惜しんだ弟子の忍基は鑑真の彫像(脱活乾漆 彩色 麻布を漆で張り合わせて骨格を作る手法 両手先は木彫)を造り、現代まで唐招提寺に伝わっている(国宝唐招提寺鑑真像)が、これが**日本最古の肖像彫刻**とされている。また、779年(宝亀10年)、淡海三船により鑑真の伝記『唐大和上東征伝』が記され、鑑真の事績を知る貴重な史料となっている。

大明寺5世紀中ごろの南北朝時代に建てられました。江苏省扬州市维扬区平山堂东路蜀冈中峰平山堂大明寺は、5世紀中ごろの南北朝時代に建てられました。

鑑真和尚が日本に来るまで住職を勤めたお寺で、唐招提寺を模した鑑真記念堂が建てられ、堂内には楠で作った鑑真座像が安置されています。



大明寺遊覧図



大きな山門殿



山門殿の入口には布袋様



山門殿の両サイドには四天王



とっても大きな三層の大雄寶殿



大きく古い山号額



大雄寶殿前の庭は狭いです



大きな釈迦三尊立派です



釈迦三尊の左右には十八羅漢



左サイドには太鼓が



大きな木魚とおりん



そして右には古い鐘が



左サイドには太鼓が



大きな木魚とおりん



大雄寶殿を過ぎ奥へ進むと山門殿



山門殿には旅立ちの鑑真和尚



山門殿左には吊鐘



碑亭が在りました、そこには立派な鑑真和尚石碑



鑑真記念館の前の広い境内



境内の一番奥には鑑真堂



屋根は素朴な鴟尾



ガラスケースには鑑真和尚像



鑑真像の目は見えていません



遣唐使船の模型



栖灵塔



広い境内に大きな塔



栖灵塔の前には石に佛の文字が



栖灵塔内1階には仏舎利が豪華なご厨子納められ展示されています



栖灵塔内1階豪華なご厨子に納められた仏舎利



江沢民が虫眼鏡で舎利仏を見ています



塔内の白玉仏



塔内の釈迦仏



塔内の観音仏



最上階からの大明寺全景



鑑真記念堂への道のり



遠くに見えるは鑑真記念堂



遠くに見えるは観音禅寺



大きな梵鐘



梵鐘に山号額



大きな梵鼓



梵鼓に山号額

鑑真紀念堂 江苏省扬州市维扬区

鑑真和尚1300年記念祭 11月24日～12月7日まで 鑑真学院図書館で坐像の展示。

奈良県の訪問団(団長・荒井正吾知事)など約千人が出席し、開会式が催された。東大寺の北河原公敬別当(住職)や奈良・唐招提寺の松浦俊海(しゅんかい)・前長老らが読経し、大明寺の能修住職らとともに会期中の無事を祈った。和上像の「里帰り」は平城遷都1300年を記念したもので、唐招提寺の乾漆像(8世紀、国宝)が1980年に大明寺で公開されて以来、30年ぶり2例目。

鑑真和尚の坐像が奈良の唐招提寺より上海万博の跡地にて記念祭を行いその後揚州の鑑真記念館に2010年11月24日の2時ご到着予定、残念な事に時間の制約のためご参列できませんでした。



鑑真和尚の坐像



鑑真和尚祭



広い境内に奥の深い参堂



鑑真学院の門



門には山号額が



其の奥には式典の看板が



大きな鑑真園書館



そこにも大きな山号額



式典の会場創りおおわらわ

3時間後には鑑真和尚の坐像が来られます

観音禅寺

資料は在りません。大明寺から徒歩 10 分の所



栖灵塔からの全景



観音山と書かれています



山門殿



山門殿の正面には布袋様



四天王



四天王



大きな園通寶殿



園通寶殿の大きく立派な山号額



園通寶殿内には釈迦像



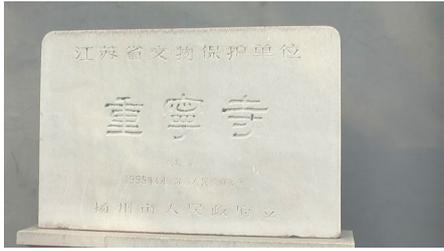
園通寶殿の両サイドには大勢の羅漢



立派な観音の立体曼荼羅

サイドには魚柳

重宁寺 江苏省扬州市维扬区长征路 資料無し 工事中のため中には入れない



入口には重宁寺の石碑



門には鍵が掛かっていました



広い境内



崩れかかった伽藍



大きな伽藍は本殿ですか

天宁寺 江苏省扬州市维扬区沿河街 中国扬州佛教文化博物馆

天宁寺は現在、中国扬州佛教文化博物馆に成っています。



入口には天宁寺の石碑



天宁寺山門殿



天宁寺山門殿の素朴な山号額



中国扬州佛教文化博物馆の山門殿



広大な広さには大きな伽藍



二層式の大きな伽藍中は仏教の歴史的を物語





釈迦の悟りの場面



鳩摩羅什の座像



玄奘三蔵の旅の姿



一番奥には大きな三層の伽藍



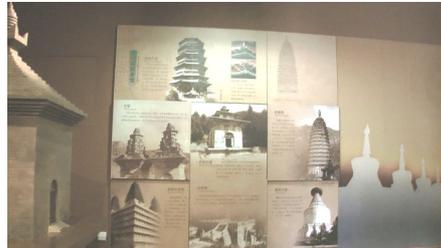
屋根には素朴な鴟尾



萬佛樓の大きく立派な山号額



内部には仏塔インド式と中国式



仏塔の色々な写真



真谛



鑑真和尚日本への旅立ちの姿

中国扬州佛教文化博物館を、同行した湯さん感想は、今迄、中国にはこの様な所はない、初めて仏教が判るような気がするとのコメント。